



技術史教育

第130号

2022.6.10

Education for History of Technology

第130号目次

- 日本技術史教育学会2022年度総会・研究発表講演会の開催を未来につなげるために……坂元愛史(1)
 日本技術史教育学会2022年度総会・研究発表講演会開催案内……坂元愛史(2)
 「関西支部2021年度(通算第19回)総会・研究発表講演会」開催報告……南 正晴(3)
 お知らせ・理事会議事録・編集後記 …… (4)

【総会案内】

日本技術史教育学会2022年度総会・研究発表講演会の開催を未来につなげるために



2022年度総会・研究発表講演会実行委員会
 実行委員長 坂元 愛史(サレジオ高専)

新型コロナウイルス感染症による長期的な混乱も解消されない中で本年2月には新たな戦争も始まり、世界が安定しているとはいえない難い昨今です。

一方ここ日本では、2年を超える疫病の混乱から少しずつ今後の在り方を探っていく状況にあります。

技術史とは人間が人間であるための行為が蓄積して織り成すものであると考えますが、今まさに過去を振り返りながら幾度も繰り返してしまう事象への解決策を見出し、未来に向けての準備をする必要性が高まっているのではないのでしょうか。

本年度も総会・研究発表講演会の時期となりました。そこではこれからの社会に有用な研究の発表と意見の交換が行われ、人類の未来に向けた新たな礎が築かれることを願っています。

総会の会場は昨年同様に東京都町田市のサレジオ工業高等専門学校となります。しかしながら新型コロナウイルスの広まりが読めないこともあり、今年も感染防止の観点からオンライン開催となりました。また開催時期につきましては本校の諸事情で通常より一か月遅れでの設定となりましたことをお詫び申し上げます。

さて、本年度総会の予定を練っている段階で、対面での開催を再開することへの模索がありました。

学会の総会や研究発表講演会の価値は、かねて会うことのできない遠方の研究者同士が顔と顔を突き合わせて話せるという点にあります。対面であるからこそお互いの理解が深まり、新たな連携が生まれ、次の世界が切り開かれる可能性が高まるのでしょう。このメリットが計り知れないほど大きいことを皆知っています。

ただ冒頭にも書きましたように、現状では対面で会

うことのデメリットがあることも考慮しなければなりませんし、逆にオンラインによる会議が一般化していくことで見えてきたメリットもあります。

インフラがある程度整っている状況下では、遠方に住んでいても複数の人間が参加し、音声と画像を用いたリアルタイムの情報交換が可能となりました。これにより、移動によって生じるエネルギーの損失が大きかったことが明らかになりました。

もちろん、コロナ禍の2年間における二酸化炭素排出量の低下が地球温暖化の改善にどのようにつながるかについては、産業構造の変化が起こっていない限りは限定的な影響しか及ぼさないという研究報告があるなど、ことは単純ではありません。

とはいえ、例えば身体に長距離の移動に耐えられない要素を持っている場合や金銭的な面でのメリットは大きく、より多くの人に会議参加の門戸を開く可能性があるとと言えます。

また、教育に与える影響も無視できません。今や何らかの事情で学校に行けない状況を抱えてしまっても、オンライン利用によって学びの継続が可能になるのではないかと期待が高まっています。

コロナ禍の状況を経て、学校に集まって学ぶことが全てであるという従来の形にはもう戻れないことを国も認識しており、対面と遠隔の両方による新しい教育像が模索され始めています。技術面でもVR(仮想現実)、AR(拡張現実)、MR(複合現実)といった方法が発達すれば、通信利用の会合による隔靴搔痒感ですら解消されていくかもしれません。

本年度のオンライン会議が未来を切り拓くための一つの試みに繋がれば幸いです。多くの方の参加を得ることでそれが可能になると信じています。